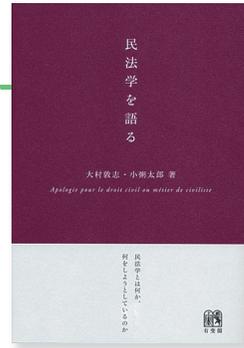


民法学を語る

大村敦志 = 小粥太郎

2015年11月発売 / 254頁 / 本体 2400円 + 税
四六判 / 並製



Book Information

編集
担当者
から

みなさんは、ふだん講義で接している法学研究者の仕事をイメージしたことがありますか？ 法科大学院の発足以来、法学研究者は教育に大きなウェイトを置くようになっていす。他方、債権法改正の動きのなかで、民法研究者の関心は解釈から立法へとシフトしています。現代日本において民法学者は何をしているのでしょうか。また、何をすべきなのでしょう。

このような問題意識のもと、本書は、2人の民法学者が、四半世紀にわたる日本の民法学の展開と将来展望について、自身の研究を素材に考察します。研究者を志す方はもちろん、そうでない方も、本書を気軽に手にとって、頁を繰っていただけると幸いです。

なお、有斐閣のPR誌『書斎の窓』2016年3月号 (No.644) に、加毛明・東京大学准教授による書評が掲載されています (<http://www.yuhikaku.co.jp/shosai>)。本書とあわせて、ぜひご覧ください。(Z)

Point!

P

書簡を往復して、民法学について語り合います。

